

P-107

訪問看護を導入し血友病患児の母親が子どもへ静脈注射ができるまでの支援の一事例

柏原やすみ

産業医科大学病院 看護部 入院支援・専門ケア・患者相談室

1. はじめに 血友病Aは血液凝固第8因子の量的質的異常に伴う先天性出血性疾患で、その治療は第8因子製剤の補充療法が主体であり生涯治療を要する。定期的に注射をするため患者の幼少期は家族が子どもに注射がすることが多い。今回、小学校高学年の血友病患児への静脈注射を母親が自宅でお行えるようになるまで訪問看護師と支援を行った一事例について考察する。2. 倫理的配慮実践報告を学術集会で発表すること、個人情報保護の方法を患児・家族へ説明し同意を得た。3. 実践及び考察 小学校高学年で血友病A重症と診断された男児は、治療のため週1回の通院で凝固第8因子製剤の静脈注射を行っていたが、静脈注射の回数増加・通院の負担軽減のために訪問看護を導入した。訪問看護師へは母親の静脈注射手技獲得まで患児への凝固因子製剤の注射と、母親へ凝固因子製剤の溶解操作の指導を依頼した。同時に患児・母親と話し合い、まず母親が自宅で子どもへの静脈注射ができることを目標とし、診断5カ月後に週1回病院で静脈注射の練習を始めた。母親はわが子に注射をすると心構えをし練習に臨むも緊張・不安が強かった。静脈注射の一連の流れを細分化し、母親の言動・手技を観察しながら、注射の溶解操作、駆血帯の巻き方、模擬血管への注射練習、薬液注入のみ母親が実施、薬液注入・抜針のみ母親が実施、全行程母親が実施と段階的に指導した。静脈注射の練習開始日・患児の血管に母親が穿刺する日・訪問看護師見守りで自宅で注射を行う日・訪問看護師がいない状態で注射を行う日を、注射手技の状態・母親の言動・患児の様子を観察しながら、患児・母親と決めていった。決めた日に次のステップに挑戦できるように日程調整し、訪問看護師とは病院での母親の練習状況と患児の様子、自宅での母親の注射時の様子や患児の様子などを情報共有していった。また、お互いにそれぞれの場での母親・患児の様子を捉えながら指導を行った。母親が病院で患児に注射を12回行った中で失敗は0回、母親が自宅で注射を始めた初日は注射を失敗したが、2回目からは失敗なく継続でき、10回目からは訪問看護師が自宅外で待機し患児と母親とで注射をすることし、失敗なく注射を続けることができた。患児・母親へステップを提示し段階的な目標決め、患児と母親の心理的準備に沿いながら指導を行うことで自宅での注射を母親が行えるようになったと考察した。

P-108

小児がんの治療過程で生じる子どものトラウマ体験

松本祐佳里¹⁾、中野 綾美²⁾

¹⁾福岡大学医学部看護学科、²⁾高知県立大学大学院

【目的】 近年、慢性的な病気に罹患し進行していくこと、治療にともなう検査や処置、長期にわたる入院による家族との別れなど、様々な医療的介入が子どもにとってトラウマとなっているとの報告がなされている。そこで本研究では、小児がんの治療過程で子どもがどのようなトラウマ体験をしているのかを明らかにすることを目的とする。【方法】 学童期以降に小児がんの治療を行った18歳～35歳までの小児がん経験者を対象に、半構成インタビューガイドを用いて、インタビューを行った。データ収集期間は、2021年5月～2022年8月であった。得られたデータの逐語録を作成し、トラウマ体験に関連するエピソードを事例ごとに抽出し、その意味を解釈してコード化した。次に一次コードから抽象度をあげて、二次コードを作成し、事例を超えて共通性と相違性から整理し、サブカテゴリー、カテゴリーを作成した。尚、本研究は、研究者および研究協力者が所属する倫理審査委員会の承認を得て行った。【結果】 2つの医療機関から承諾を得られ、小児がん専門医の紹介を受けて10名の小児がん経験者から研究協力が得られた。分析の結果、5つのカテゴリーと17のサブカテゴリーが抽出された。小児がんの子どもは発症した段階で、【経験したことがない身体の変化に恐怖を覚え（る）】、その後の【急展開する事態に何が起きているかつかめない脅威にさらされ（る）】ていた。入院、治療が開始されると、【治療による苦痛や恐怖により普段の生活が脅かされ（る）】、【常につきまとう病気や死への不安を抱え込む】日々を送っていた。入院による治療が終了し、学校生活を送る中でも、【当たり前であった日常が消えていく状況にどうすることもできない】経験をしていた。【考察】 本研究の小児がんの子どもは、自らの力ではどうにもならない“がん”を乗り越えるため、辛い治療や入院生活を送る中で、身体的苦痛や友人や社会とのつながりが喪失する体験をしていた。経験したことがない身体の変化は生命を脅かす出来事として、また、常につきまとう病気や死への不安、当たり前の日常が消えていく状況は、小児がんの子どもにとって長期的な影響を与えていた。小児がんの治療過程において、何がトラウマ体験であり、治療や処置がトラウマにならないようにするためには何が必要であるか、子どもに携わるもの全てが理解して関わることが求められる。